

2012 年度第 5 回物学研究会レポート

「中国解剖―世界の思想を予言する」

黒川雅之氏

(物学研究会 代表)

2012 年 8 月 20 日



BUTSUHOAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

8月の物学研究会は、7月の中国のデザイン会社LKKグループを率いる賈偉（ジャ・ウェイ）さんのレクチャーに続き、黒川雅之さんによる、「チャイナデザイン」の第二部です。賈偉さんは、これからのチャイナデザインの課題として、「中国、東アジアの文化、アイデンティティ」をあげていましたが、黒川さんも「西洋に対する東洋、東アジア文化」に注目しています。

今回は「中国解剖__世界の思想を予言する」と題し、デザインや物づくりの根底をなす、中国__東アジア__世界の思想と文化を語っていただきました。以下、サマリーです。

中国解剖__世界の思想を予言する

黒川雅之 氏

(物学研究会 代表)



01：黒川雅之氏

こんばんは。誰かとビジネスを始める場合、まずは相手のことを調べ、好きになり、信頼することが出発点だと思います。僕は中国企業と仕事をしてまもなく1年になります。そこで今日は、僕自身の意識の中にある中国を解剖して、その中から普遍的な中国の姿を浮かび上がらせることができればと思っています。では、3部作でお話しします。

第1部：体感から見た、中国の現状

最初は、僕が肌で感じた中国の現状についてエピソード風に紹介します。まずは、僕がなぜ昨年9月から中国とビジネスを始めたかの理由ですが、きっかけは北京の中央美術大学で行った「東アジアの美意識」というテーマの講演会でした。講演終了後、「黒川さんと契約したい」と声をかけてきたのが、現在のパートナーであり、先月の物学研究会でレクチャーしてくれた賈偉さんでした。ここから僕と中国との深い関係が始まったのです。

では、本題に入ります。「東アジアの美意識」というキーワードは今、中国人にも関心の高いテーマです。というのは、中国は今、国際化しつつありますが、国際化が進むほど、自国について考えるようになる。西洋の真似をやめたとき、では次に何をつくろうかと考え、そこから自分たちの美意識について目を向けるようになるからです。

だから、「デザインへの関心」がとても高いです。「若手デザイナー」も急増しています。彼らはデザイン事務所に出資する資本家も兼ねています。でも、中間管理職であるチーフデザイナー不足に悩んでいます。いわゆる熟練のデザイナーもいないので、若手デザイナーは指導者を欲していますが、大学の講師はほぼ現役デザイナーという状況です。

「デザイン展」もよく開催されています。デザインとビジネスが緊密な関係にあり、デザインは経済活動だととらえられています。日本ではデザインは文化活動だと思うデザイナーも少なくないし、「デザインはアートか否か」とよく議論にもなります。中国ではアーティストが「アートとデザインの間のもの」をつくることは当たり前。この辺は中国を見習ってもらいたいなと思います。

「デザインウイーク（設計週）」も開催されています。今年の北京デザインウイークは9月28日から、「源自東方」というテーマで開催される予定です。東方という自らの文化を源として世界に発信するという意味ですが、中国や東洋の美意識を世界に向けて発信する時代がきていると感じますね。ちなみに、僕が基調講演をすることになっていますし、日中の伝統工芸について情報交換するセミナーやシンポジウム、展覧会なども行われます。

とはいえ、「ヨーロッパ志向」も根強く、政府主導によるイタリア視察などもよく行われていて、実は今年のデザインウイークのゲスト国はイタリアです。ただ、1カ月ほど前にイタリアがダライラマを名誉国民にすると決めたことを、中国は「ダライラマ事件」として問題視し、急遽、イタリア関連の催しが縮小されました。その分、日本の規模が広がりましたが、最近の反日感情の高まりから、今後どうなるか分かりませんね。

また、「中国政府の強大さ」には驚きます。管理・支配体制が強く、僕には清王朝が崩壊して共産党王朝ができたと思えるほどです。経済活動の中心である土地はすべて国有地のため、その管理者である官僚が力をもつので、汚職などの温床になってしまうのです。

「ブログでのコミュニケーション」も盛んです。僕の講演中でも、写真を撮ってブログに掲載してコミュニケーションしています。「有名人好き」なのも特徴です。自分自身の実績をアピールすることも好きですね。

一方、課題もたくさんあります。たとえば、「市民による文化生活の体験が不足」しています。風呂に入ったことがないのはもちろん、シャワーのない家庭も少なくありません。玄関先はきれいでも、家の奥にいくとキッチンもトイレも貧相ですし、所有する食器の数も少ないです。僕は、「生活文化大革命」が必要だと感じています。そうでないと本当の国際化は進まないでしょう。

とんでもない「格差社会」です。貧困層が多い一方で、一説によれば、約2%を占める富裕層が国民総生産の70%をシェアしているそうです。「ランク付けや階層分け」も好きですね。これは富裕層の感性だと思いますが。

思想的には「長いものに巻かれる」層と、反抗する層に二分されます。「中華思想」も根強く、怖いです。普通の若者でも、「中国が世界を制覇する」という思いをどこかに持っている

ので、いつか世界平和を脅かす問題を起こすのではないかと心配しています。

以上をまとめると、中国は、「生活文化大革命が必要」、「美意識がプリミティブ、高度な美意識がない」、「世界標準を知らない、巨大な田舎者の集団」、そして、「成長国であり、未開発国であり、近代化が未完了の国」となります。成長期にあるということはまだ子どもだということ。成熟国である日本は年寄りなのだから、必要なところは助けてあげる意識が大事だと思います。

深くつきあっていくと分かりますが、個人的には「いい奴ら」であり、「大好きな連中」であり、「能力もある民族」です。今後、ビジネスをする機会も増えていくでしょう。今から、中国に対してきちんとした考えを持っておくことが大切だと思います。

第2部：客観的な分析による中国

(1) 中国って何だ

第1部は僕自身が体感した現在の中国について紹介しましたが、ここからは資料などを元に中国について分析してみたいと思います。

中国には民族闘争の長い歴史があります。支配されると反発が生まれるため、戦いごとに政権交代が繰り返されました。権力争いに伴って文化もさまざまに混合し発展してきました。こうした歴史を経て、現在の中国は「漢族」を名乗る人が圧倒的多数を占め、人口の92~94%に上ると言われています。

近代史を振り返ってみると、1912年に長く続いた王政が倒れ、1949年には毛沢東が中心となり、社会主義国家が成立します。「共産化」によって、それまでさまざまな役割に就いていた資本家や知識層が下放され、代わりに農民や労働者が中心の国として中国は生まれ変わったわけです。4000年の歴史を途絶えさせ、伝統的な文化を否定する共産主義の考え方は、その後の中国文化の形成にも大きな影響を与えました。

1966年、権力に陰りが出た毛沢東は、他の権力者を排除しようと若者を使って権力闘争を始めます。いわゆる「文化大革命」で、彼が死ぬ1976年までちょうど10年続きました。毛沢東の死後、1978年に鄧小平が登場し、開発解放策を始めます。政治は社会主義のまま、経済は自由主義にという大きな方針転換でした。この政策のおかげで、現在の中国の大発展が始まったと僕は思っています。

1989年、開発解放策に伴う汚職などに対する市民の不満が爆発し、天安門事件が起きますが、事件が鎮圧に向かう辺りから中国は高度成長期に入っていきます。以前は人件費が安く「世界の工場」と呼ばれましたが、今は人件費も高くなり「世界の市場」と言われるまでになりました。

■中国が抱える8つの矛盾

このように見てくると、中国はさまざまな自己矛盾を抱えていることが分かります。まず、「1. 漢族の民族的矛盾」。自分が漢族だと思えば漢族と名乗れるので、中には純粋な意味での漢族ではない満州系や南方系の人々も含まれていて、民族自体に矛盾があります。

つづいて、「2. 否定した過去の文化と宗教の再評価の矛盾」。国際化に伴い、自国の4000年の歴史を再評価しようとしながら、依然として宗教を否定し続けるところに矛盾があります。また、「3. 自由主義経済と社会主義管理の矛盾」。経済活動には自由主義の考えを奨励しながら、管理体制は社会主義のままという矛盾があります。情報管理をはじめ政府がすべてコントロールしているし、軍隊の力も非常に強い。僕には「政府という名の皇帝」が支配する王国に思えます。

さらに、「4. 土地の共有（理念）と政府独占（現実）の矛盾」や「5. 共産平等思想と格差社会の現実という矛盾」、「6. 中華思想と『長いものに巻かれる』思想の矛盾」、「7. 国際化と情報管理の矛盾」、「8. 建前と本音の矛盾」などもそうです。中国人がたくましいのは、こうした自己矛盾の中で鍛えられ、生き延びているからかもしれません。

以上から、「中国とはどんな国か」を一言でまとめると、1. 「政府という名の皇帝」が支配する王国、2. 成長国というよりも近代化未完の国、3. 政府という武士階級と富裕層という商人階級の国、4. 情報化・国際化に伴うナショナリズム台頭の恐怖がある国、5. 多様性の典型が見える国といったところになるかと思います。

(2) 東アジアの文化

僕は最近、国境の存在は重視しておらず、自己紹介では「僕はアジア人」と言っています。特に、海に面して中国、韓国、日本が向かい合う地域を「東アジア」ととらえ、注目しています。東アジアはある種のガラパゴスと言われるほど、世界的にみて特異な文化を発達させてきた地域でもあります。それは、地形的な障害物の存在も一因です。東側には広大な太平洋があるし、西側にはヒマラヤ山脈や高原、砂漠などが広がるため、ヨーロッパ人や文化の流入が遮断され、植民地化も遅れたことで、東アジアは世界の桃源郷的な存在として今に残ったわけです。

ただし、中国、韓国、日本の3国の文化には、それぞれ特徴があります。まず、「中国は大陸の文化」です。多くの国と国境を接するため多様な文化が流入し、カオスの混合が起きました。「韓国は半島の文化」。半分は大陸なので他の文化が流入しましたが、半分は島なので追いつめられる。この地形が韓国人の「恨の文化」をつくっているように思います。一方、「日本は島の文化」です。これ以上どこへも行けないというターミナル性とガラパゴス性を併せ持っています。独自の文化をつくる状況が用意された桃源郷の、さらに端っこに位置するおかげで、純粋に造成され、完成度の高い日本文化は東アジア文化のエッセンスだと僕は思います。

■ 建築に見る、西洋文化と東アジア文化の相違

僕は建築家ですから、ここで建築から見た東西文化を比較してみます。まず、「概念」を比べると、西洋建築は「境界概念規定」型です。洞窟を原型とし、石で壁や箱をつくり、物理的に守ってくれるものを周囲に置きます。一方、東洋の建築は「中心概念規定」型。樹木を原型とし、木製の柱と屋根からなる傘をつくります。中心にあるものを精神的なよりどころにするのです。

では、具体的な部分について比較してみます。「窓」は、外と内の境界が明確な西洋建築では、先に壁をつくってから穴を開け窓にします。東洋は元々開放されているので窓という発想はなく、まず柱を立てて壁を埋めていき、残ったところが窓になります。面白いのは中国の建築で、西洋と東洋をあわせ持つ点が特徴。壁で囲った内側に柱を立てる「四合院」という独特の様式です。この様式は現代にも残っていて、たとえば路面店はなく、ショッピング街はビルの中にあります。

また、西洋は靴を履いたまま部屋の中で家具を使って生活するスタイルですが、日本は靴を脱ぎます。それは家具でなく、床、つまり畳を置き、部屋でなく、間（ま）という空間で過ごすスタイルだからです。中国はやはり東西の混合です。椅子に座りながら靴を脱ぎ胡坐をかく人が描かれた古い絵からも分かるように、庇や柱のある空間で生活しながら、西洋化が早い時代から始まったため家具文化も発達しています。

「食卓」も西洋はテーブルを置き、規格化された食器を並べますが、中国は椅子の上に胡坐をかき、テーブルには規格化された食器に加え、大皿も並べます。日本は床に座って個膳を使うので、食器も夫婦茶碗や子ども用など個人に合わせて使い分けます。このように東西の文化では対照的な特徴が見られ、さらに東アジアの中でも日本と中国では独自に発展した文化があることが分かります。

では、東アジアの文化についてまとめましょう。まず、「中国は東アジア文化の源流である」。日本や韓国の文化の大部分はやはり中国に起因しています。次に、「中国は東アジアの文化圏の一員である」。なぜ「一員」かということ、中国は西洋化が非常に進んでいて、東アジアとヨーロッパ文化の二面性を持っているからです。最後に、「日本は東アジア文化の典型を保存する」。中国は西洋化しているので、純粋な意味での東アジア文化を保存しているのは日本だけという意味です。中国文化を少し日本化しながら保存していると言い換えてもいいでしょう。だから僕は中国人に、中国文化を再構築するには、日本文化の研究から始めるといいと勧めることもあります。

第3部：世界と東アジア―近代思想と東アジアの思想

最後に、文化の背景にある思想について考えてみます。まず、西洋には、キリスト教とイスラム教の対立という長い歴史があり、これが思想にも大きな影響を及ぼしています。700年頃にイスラム教徒がイスラム帝国を建国しましたが、1100年頃からキリスト教徒が聖地エルサレムの奪還のため、十字軍の遠征を始め、中世に入るとキリスト教が優位に立ちます。

彼らの価値観がやがてヨーロッパ全体を支配するようになり、近代化が始まります。つまり、西洋文化はキリスト教の影響を強く受けており、いわば、「一神教的価値観」に支配されていると言えます。

この西洋の思想には3つの柱があります。1つは「自己の外にいる神を信仰する」こと。最初に神がいて、神が人間をつくり、動物をつくったという考え方です。2つ目は「すべての規範は神」であり、太陽暦や愛、罪などが例です。3つ目はアルファベットや哲学のように「全体が先にあり、その中に微細なものが存在する」ことです。

一言でいうと、「構造の思想」で、具体例を挙げると、客観性、知性、哲学、構造、正義、愛、情報伝達、世界観、過去と未来、都市、社会などになります。

一方、東洋の思想の柱は、まず「神的なもの、つまり聖性を自己の中に育てる」こと。神は外でなく自分の内にいるという考え方で、それをたとえば、禅仏教では悟りと言ひ、儒教では人と人の関係の思想、道教では風水や気功など自然崇拝になります。2つ目は「自然という規範」。3つ目は「細部が動的均衡をつくる世界観」で、漢字や美意識などがその例です。

一言でいうと、「群れの思想」であり、具体的には主観性や野性・身体性、美意識、群れ、美、情、刺激、こことあそこ、今、集落、自己などに価値を置きます。西洋の思想とは明らかに対立的な思想であることが分かります。

さて、ここでいう「群れ」について、もう少し詳しく説明すると、「全体性を放棄して自己の身体性に帰ること」です。たとえば、魚の群れは誰かに支配されているのではなく、一匹一匹が自然に隣の魚との距離もスピードも一定にして泳いでいます。同様に、神が社会を支配するのではなく、一人一人の身体性を中心にして生きていこうという、とても理想主義的な考えです。

群れとはまた、「多様な価値の動的均衡」でもあります。均衡が崩れない限り、人それぞれの価値観があつていいという考え方です。また、群れは「非連続体の連続体」でもあります。人それぞれ異なる考え方が何らかの刺激を介してつながっていくということです。さらに、群れとは「多様性であり、多様な文化の共存」でもあります。

こうした東西の思想の違いは絵画をみるとよく分かります。西洋画は宗教的なものや戦争に関する題材が多く、人物や物を中心に置く構図が一般的です。一神教的価値観がよく表れていると思います。

一方、東洋画では植物や風景など自然を題材にしたものが多い。有名な『風神雷神図』だって、考えてみれば風も雷も自然現象です。一神教的価値観に対して、自然的価値観と言ってもいいかもしれません。

■東洋の文化を形づくる 12 の概念

こうした東洋の文化は次に挙げる 12 の概念を大切にしています。

1. 存在と素材：身体感覚こそすべて、新しさよりも深さ

東洋文化の基本です。たとえば、何もない空間にいと不安になりますが、柱 1 本、椅子 1 個あるだけでホッとします。物の存在そのものが人を安心させる。それが建築です。デザインとは人をホッとさせる存在をつくることだ、といってもいいかと思います。

2. 野性と知性：知性も野性の一部

僕は、知性はキリスト教徒がつくった近代思想の産物だと考えているので、否定していません。「知性も野性の一部」と思える一例は母親と胎児とを隔てる胎盤です。二人の間で血液の交換は遮断しながら、栄養素だけを胎児に与えることができるという優れた機能を持っています。人間の科学力、つまり知性では生み出せない胎盤を、母体は生まれつき持っているわけで、これを野性だとすれば、知性も野性の一部だと言わざるを得ないと僕は思うのです。

3. 非連続性：微細なものの集合

「人は孤独である」ということを大前提とし、社会はそんなバラバラで連続しない微細なものの集まりでつくられているという考え方です。

4. 負の表現性：引いて来させる、削って沢山語る

負という概念も非常に重要です。ポジティブカーブは見る人に拒絶を感じさせ、ネガティブカーブは受容を感じさせます。両者をあわせ もつ太極図はすばらしい。宇宙の根源として重視されるのも分かります。二元論でなく、相対的な視点が重要です。

5. 情と恥：こころの中に繋がり動機を持つ

情とは自分の中にある他者への愛。他者が痛んだとき自分の中でも痛みを感じるのも情です。また、恥とは自分の内部にある恥じらいの感情のことです。情に対して、西洋文化で重視するのが愛。他者に捧げるものであり、他者の痛みを治療を祈るのが愛です。恥に対しては罪。神に対する恥じらいの感情です。

6. こことあそこ：身体から、今から、ここからの発想

すべての出発点を自分に置くという考え方です。自分の中に人類がいるという考えにもつながりますし、時間という概念を自分の外に見る西洋文化に対して、東洋の文化では時間は自分の内にあると見ます。

7. 中心概念：概念の周縁は曖昧

物事の特徴を中心に概念化し理解しやすくしますが、周縁はあえて曖昧なままにしておくことを価値とする考え方です。たとえば、女性の体が美しいのは各パーツの境界が曖昧だから。スパッと切って部品でつないだロボットは美しく感じません。

8. 気と間と縁：間がつなぐ非連続な細部

たとえば、西洋画は真ん中に主役である人や物を描きますが、東洋画は中心に間があり、それが主役と考えます。人や物のまわりには気があり、その気が間をつくっています。縁もまた、曖昧な気の一部です。

9. 逆光と陰鬱：華麗な影、饒舌な無、無為自然な存在

逆光によって物体は輝きながらシルエットになりますが、そういう陰影の美を大切にするのが、東洋の美意識です。

10. 偶然性：自然という規範

地球に生命が誕生したのも一種の偶然からであるように、物事のほとんどが偶然の産物という考え方です。

11. 底知れぬ不安：不安からの飛翔

胎児は母親の胎内という最高の環境から、ある日突然、追い出されます。つまり、人間は底知れぬ不安とともに生まれるわけです。その不安から脱出しようとして建築をし、家具や道具をつくるのです。人間は落ち込むからこそ飛翔できる。不安と安心とを、欠損と充足とを行ったり来たりすることが、生命活動のエンジンになるのだと思います。

12. 哲学と美意識：知より美

知や哲学はキリスト教の発想ですから、日本に哲学はなく、知ではなく美を大切にします。哲学は緊密につながっているので、もし根っこに間違いが起これば構造体は成立しませんが、人や物それぞれに異なる美があり、それらが大きな群れを成していると考えるのが東洋の文化です。

今日は急ピッチで盛りだくさんの話をしましたが、以上で終わります。

以上

2012 年度第 5 回物学研究会レポート
「中国解剖―世界の思想を予言する」

黒川雅之 氏

(物学研究会 代表)

写真・図版提供

01 ; 物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2012 BUTSUGAKU Research Institute.